

伽藍受染堂にて
毎月8・18・28日の午前9〜11時頃に護摩が焚かれます。拝観可。写真は2本の杓で油を注いでいるところ。左手には三鈷杓が握られています。



震宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第132号

令和元年10月7日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山3006
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話 0736-56-2029
URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

開館時間
 ■ 5月1日〜10月31日 8時30分〜17時30分
 ■ 11月1日〜4月30日 8時30分〜17時00分

拝観料 大人 600円
 高・大学生 350円
 小・中学生 250円
 高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

休館日 年末年始のみ
専用駐車場あり

世界遺産登録15周年記念 秋期企画展

祈りのかたち —密教法具の世界—

10月12日(土)〜
令和2年1月13日(月・祝)

第132号 目次

- 企画展のご案内……………2〜3
- 収蔵品の紹介104……………4
- 高野山の古建築第三十五回……………5
- 特集友の会文化講座のご報告……………6〜7
- 文化財ふれあい講座のご報告……………8〜9
- 高野山の文書(十九)……………10
- 高野山霊宝館からのお知らせ……………11
- 高野山でお茶しましょ 第2回……………12

毎月21日(弘法大師の日) ご来館の方にプレゼントあり! ホームページ割引券もご利用ください

世界遺産登録15周年記念

令和元年度 秋期企画展

「祈りのかたち — 密教法具の世界 —」

令和元年10月12日(土)～令和2年1月13日(月)祝まで

前期 令和元年10月12日(土)～11月24日(日)

後期 令和元年11月26日(火)～令和2年1月13日(月)祝

休館日…12月28日(土)～1月4日(土)

※関西文化の日に協賛し、11月11日(月)を無料開館日とします。



重文 銅五鈺鈴 唐時代 正智院
中国 唐時代(八世紀)の
貴重な逸品です。



銅製金鑿 鎌倉時代 宝寿院
仏心の眼を開く法具。
古代インドでは、
眼病治療の器具でした。



宝剣 江戸時代 有志八幡講
仏様は時として法具で表現されます。
宝剣は不動明王の三昧耶形です。

主な展示品

彫刻

未指定 不動明王坐像

金剛峯寺

絵画

未指定 両界敷曼荼羅

宝寿院

密教では人々の願い事を祈る祈願や、亡くなった人の供養のための勤行や修法の際、僧侶は「密教法具」という仏具を使います。これらは元々古代インドでは戦闘に使う剣などの武器であったものが、密教の祈りの法具として取り入れられ今日の密教法具の形になりました。その用途は、勤行や修法の際、煩惱を切り裂き、魔を退けることを主とし、様々な仏前作法に取り入れられました。通常、密教法具はお堂の中で本尊の修法壇に供えますが、時に屋外では建築の前に行う地鎮祭の際、地面に埋めたりします。密教法具を手を持つ仏は多く、また曼荼羅に描かれる仏の姿を密教法具として抽象化したものなどもあります。今回の展覧会では、高野山の金剛峯寺と子院(塔頭)に伝わる、祈りに用いる様々な形をした密教法具、また関連する彫刻、絵画などを紹介いたします。



高野大師行状図画 江戸時代 成慶院



両界敷曼荼羅 江戸時代 宝寿院



愛染明王十七尊曼荼羅図 江戸時代 宝寿院



重文 金銅独鉗杵(金銅仏具のうち) 平安時代 金剛峯寺



重文 金銅三鉗杵(金銅仏具のうち) 平安時代 金剛峯寺



重文 孔雀文髻 鎌倉時代 蓮花院



※ミュージアム法話
 (お坊さんによる法話と展示解説)
 10月19日(土) 13時より 約45分間

※ミュージアムトーク&密教体験「法具に触れる」
 学芸員による展示解説&密教体験。
 実際に僧侶が使う密教法具に触れることができます。
 10月26日(土) 11月9日(土) 13時30分より 約90分間

※いずれも予約不要、参加費無料(要拝観料)

※期間中、一部展示替えを行います。
 ※文化財の保存上、展示品が替わる場合があります。

■考古

県指定 金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具
 (金剛峯寺大門・徳川家霊台・金剛三昧院・霊宝館出土)
 金剛峯寺

■書跡

国宝 続宝簡集第十二(御影堂宝物目録) 金剛峯寺(前期)

■工芸

未指定 弘法大師十大弟子像(十二幅のうち十幅) 金剛峯寺
 未指定 五大虚空蔵菩薩像 円通寺
 未指定 愛染明王十七尊曼荼羅図 宝寿院
 未指定 高野大師行状図画 成慶院

重文 金銅独鉗杵(金銅仏具のうち) 金剛峯寺
 重文 金銅三鉗杵(金銅仏具のうち) 金剛峯寺
 重文 銅五鉗鈴 正智院
 重文 蓮華形柄香炉 竜光院
 重文 孔雀文髻 蓮花院
 県指定 金剛盤 親王院
 未指定 金銅華瓶 金剛峯寺
 未指定 銅製金篋 宝寿院
 未指定 宝劍 有志八幡講
 未指定 護摩炉 金剛峯寺

収蔵品の紹介 104

金銅華瓶

一口

銅製鑄造鍍金 鎌倉時代（十三世紀） 金剛峯寺蔵

高さ一六・二cm 胴部径九・〇cm

密教修法に欠かせない名脇役(?)



箱書：「高祖寶前中瓶」「沙門仁山之」「奥院御廟前拜殿」



重文 金銅華瓶（灌頂道具類のうち）
電光院蔵 ※ 秋期企画展で展示

華瓶は花瓶とも表記し、ご覧の通り、いわゆる「かびん」です。用途によっては宝瓶や賢瓶とも呼ばれます。華瓶が密教法具？と思いかもありません。お寺の本堂や伽藍の大塔・金堂などで中央にしっかりと立てられている大壇（修法を行う際に用いる、密教法具などを並べた台）には四隅と中央に置かれています。インドの、香水を入れる宝瓶が起源とされ、現在は表紙写真のように五色の蓮華の造花を立てて供えることが多いですが、本来は生花を挿したのでしょうか。ほとけさまの空間を荘厳するのに欠かせないだけでなく、堂塔を建立する際には、地鎮のために華瓶（賢瓶）に五宝・五香・五葉・五穀を入れて蓋をし、土中に埋めます。大壇の五つの華瓶にも、これらの内容物が納められています。

今回紹介する華瓶は、胴に刻まれた宝塔と蓮華の葉・蕾の絵が特徴的です。表面には鍍金が施され、当初は全体が金色に輝いていたでしょうが、八〇〇年近い時を経てその多くが失われています。また、このような上部が張った卵形の胴は非常に珍しいようですが、高野山にはよく似た形の華瓶がもう一口、伝わっています。それは電光院の「灌頂道具類（重文）」に含まれており、同じく鎌倉時代の作とみられ、胴には蓮台の上に立てた、火炎光背を負う幡（荘嚴用の旗）と、蓮華の葉・蕾が線刻されています。こちらは高さ一四・九cm、胴部径八・五cmと若干小さいですが、形や作風からも元はセットだった可能性が高いです。華瓶に挿す蓮華の色はそれぞれ金剛界五仏をあらわすとされ、塔は毘盧遮那仏（大日如来。金胎共通）、幡は胎蔵界五仏のうち宝幢如来の三昧耶形（シンボル）なので華瓶と蓮華で金胎不二を表現しているのかもしれない。他の胎蔵界五仏（開敷華王如来・無量寿如来・天鼓雷音如来）をあらわす華瓶も当初は存在したのでは？と想像が膨らみます。

（福形安希子）

連載

高野山の古建築 第三十五回

重要文化財 金剛三昧院客殿・台所(三)

鳴海 祥博



「大広間」の正面側を室内から見返す 棧唐戸の内側には腰高障子が、部戸と舞良戸および中門境の杉戸の内側には、上から下まで全面に紙を貼る明障子が建て込まれている。



「大広間」の正面側を広縁から見る 左が棧唐戸で、右は部戸。部戸の内側には明障子が建て込まれている。広縁の突き当たりには杉戸がある。



棧唐戸の組子の詳細 右は外部、左は内部の組子で、内外で意匠を異にしている。織細で技巧を凝らした組子は逸品である。



「角の間」の正面側を広縁から見る 棧唐戸の左が舞良戸で、開けた状態。内側に片引きの障子が入っている。その奥には「帯戸(おびと)」が、広縁の突き当たりには杉戸がある。

今回は、金剛三昧院客殿の建具を紹介しましょう。客殿の床面積は三四五坪、昔風に

いえば一〇四坪、畳二〇八畳敷きほどの大きさで、内部は前後の広縁と十三の部屋に仕切られています。

客殿の外回りや部屋境の仕切りはほとんどが建具で、壁は客殿の中央に位置する「持仏の間」の三方と、上段正面の床の間、違い棚、帳台構えの部分だけです。

延べ五五箇所の柱間には、襖や障子などの建具が総数一七八枚、建て込まれています。仮に全ての建具を取り外すと、客殿は正面から奥まで

五三本の柱が建つだけで何も遮る物のないテントのような姿になってしまいます。特に建物の外部に全く壁が無いというのは、現代の住宅と比較すると驚きです。

これだけたくさんの間仕切りがあると、建具の種類も多彩です。

様々な行事の場である「大

広間」の正面には「棧唐戸」「部戸」「舞良戸」が建て込まれています。

「棧唐戸」は本来仏堂に用いられる建具です。ここを入ると正面に「持仏の間」があるので、ここが仏事や儀式の際の正面であることを示しています。

棧唐戸に続く三間は「部戸」となっています。これは上下に分かれた二枚一組の建具で、上の材は長押から吊って取り付け、上に跳ね上げて開けま

す。下の材は取り外し式となっていますが、建て込んだままだと、ここからは出入できません。平安時代に遡る古い形式の建具です。本来は寝殿造りなど、住宅用であったと思われませんが、古くから仏堂にもたくさん使われています。

大広間の一番端には「舞良戸」が引き違いに建て込まれています。ここが部屋への出入り口です。これはたくさんの横棧を打ち付けた独特の板戸で、住宅用の建具のようです。仏堂にも用いられますが、

正面に使うことは無く、背面側など、人の出入りする通用口に用いられています。大広間と中門の間には「杉戸」が建て込まれています。

これは、四方に杵を組んでその中に一面に板を張った建具です。正面と背面の広縁の端も杉戸で区切られています。舞良戸も杉戸も同じ引き違いの板戸なのですが、閉めたときの印象は随分違います。杉戸は閉めたとき板壁のようにも見えます。閉まっているときは「壁」、つまり「立ち入り禁止」を意味する建具だったように思えます。一方舞良戸は閉まっても、そこはあくまでも出入り口で、「進入可」を表す建具だったのではないでしょうか。

大広間の正面側の建具は、古くから仏堂にも用いられてきた格調高いものですが、室内に入って見返すと、印象は全く違います。それは棧唐戸や部戸の内側に明障子が建て込まれているからです。引き違いの舞良戸の内側にも明障子が一枚建て込まれています。建具を開放した時、目隠しができるように、また風の入らないようにする工夫です。

客殿を見学する機会があれば、豪華な紺碧障壁画の描かれた襖だけではなく、様々な伝統的な建具にも注目してください。

※年に数回、特別公開期間あり



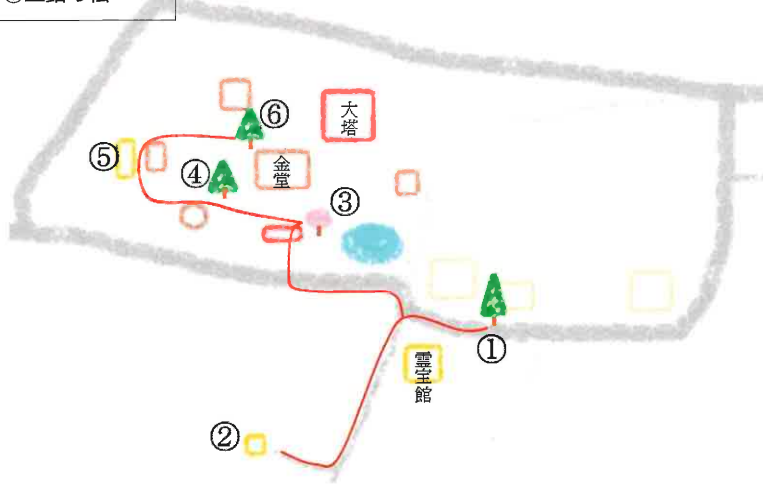
⑥三鈷の松 弘法大師が唐より投げた三鈷杵が引っかかっていたとされる松。お大師様は三鈷杵がたどり着いたこの地こそが、密教をひろめるのにふさわしいと高野山を開創されました。

高野山霊宝館友の会文化講座
 「高野山にまつわる不思議な話」
 イベント報告

令和元年七月十二日(金)に高野山霊宝館友の会会員の方を対象に、文化講座を開催いたしました。今回の講座は二〇一九年度春期企画展「高野山の不思議な話」にちなみ、講師に高野山大学名誉教授山陰加春夫先生をお招きし、色々な話が伝わる場所を巡り、ご教授いただきました。

霊宝館をスタートし、まずは覚海上人(かくかいしやうじん)にまつわる場所へ。増福院前の杉の木には、覚海上人が天狗となつて飛び立ったという話が伝えられています。覚海廟を参拝後、壇上伽藍へ。対面桜、登天の松と杓子の芝、御社、三鈷の松を巡りました。暑い中、たくさんの方がご参加くださいました。山陰先生、不思議なお話をたくさんありがとうございました。

- ① 増福院前の杉
- ② 覚海廟
- ③ 対面桜
- ④ 登天の松
杓子の芝
- ⑤ 御社
- ⑥ 三鈷の松



③対面桜 大塔を再建した平清盛と弘法大師が出会った場所。大塔前の桜のもとにお大師様はお姿を現し、さらに巖島神社の修理を勧め、「悪行を行うことがあれば、このさき子孫まで願望が叶うことはないだろう」と伝え消えていったそうです。

⑤御社 弘法大師を高野山へ導き、この地に真言密教の修行道場をつくることをお許しくださった丹生・高野両明神をお祀りしています。



④登天の松と杓子の芝 明王院の僧、如法上人がこの松より兜率天(弥勒菩薩の浄土)に昇天され、その時齋食の用意をしていた弟子もあわてて後を追って昇天されたそうです。弟子が握っていた杓子が昇天の途中で落ちてきた場所が「杓子の芝」です。

◎友の会会員募集
 〈年会費〉
 一般会員(個人) 3,000円
 賛助会員(法人) 30,000円
 ・会員証提示で会員様のほか同伴者3名様まで霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
 ・年4回発行の機関誌「霊宝館だより」送付
 皆様のご入会をお待ちしております。

「はまぐりから天狗になった覚海」

昔々、覚海上人というお坊さんがいらっしやいました。あるとき、上人は自分の前世が何であったかを知りたいと思いたちました。御廟でお大師様にお祈りしておりますと、このようにお教えくださったのです。覚海上人は七度の生まれ変わりを経て、人間となり高野山の検校(法印、位の高いお坊さん)になることができたということでした。その七回の生まれ変わりとはい、一回目、四天王寺の西の浜で蛤として生まれ、子供のいたずらによって四天王寺金堂前に捨てられてしまいました。ですが、毎日お経をきくことができました。二回目、四天王寺の境内で犬として生まれました。ここでもお経を毎日きくことができました。三回目、お経を書く料紙を運ぶ牛として。四回目、熊野詣での人々をのせる馬として。五回目、護摩を焚く行者として。六回目、奥之院の承仕(現在の行法師。お大師様のお食事を用意するなど、御廟の管理をする者)として。そして七回目に、覚海上人本人として生まれ変わったのでした。

検校となられてからは、修行を邪魔する魔物から修行者を守りたいと思ひ、上人は自ら魔物の姿となることよって魔物を悟し、仏教の教えへと導こうとなさいました。さらに修行をつまね、つい

には、腋から羽が生え天狗となって昇っていかれたのでした。天狗になった覚海上人は現在もずっと高野山をお守りくださっています。

霊宝館では、毎月十九日の月並の法要の際、必ず「南無覚海尊師」と真言をお唱えしています。



上 ②覚海廟
 右 ①増福院前の杉

博学連携事業 高野山高等学校 「文化財ふれあい講座 高野山町石拓本体験」ご報告

文化財ふれあい体験事業は、高野山高等学校と高野山霊宝館が、次世代を担う高校生に、実際に文化財に触れ、歴史や文化財の大切さを体感

してもらうことを目的として、平成二十九年年度から毎年実施している博学連携事業で、今年で三年目になります。



今年七月三十日(火)・三十一日(水)の両日にわたり、高野山高校の生徒二十五名(通信制)と保護者・教員五名が霊宝館学芸員による指導・案内の下、拓本体験と霊宝館の見学を行いました。

拓本は石碑や石仏、石塔に彫られた銘や文様を紙に写し取り、石塔に刻まれた文字を読み取り、記録を取る技術です。手順は画仙紙を濡らして表面に貼り付け、タンポ(綿を包んだ布で、墨を含ませたもの)を打って文字を浮かび上げさせます。表面の凹凸を利用



し、文字などが彫られた部分には墨が付かず、また画仙紙は丈夫な紙で、石の表面に墨が浸透して付着することはありません。今回は大門周辺にある四ノ八町石(重文、鎌倉・大正時代)の拓本を実際に現地でき、町石や町石道について学ぶと共に、文化財を護り伝える苦労や大切さを実感できたかと思えます。

今回体験実習に参加した生徒の感想を掲載いたします。

「町石の拓本制作について」

浦 楓歌

昨日初めて町石の拓本制作を行いました。

最初に町石の拓本とは何だろうと思っていました。説明を聞いて初めて町石というものが高野山までの道のりとして建てられたことを知り、拓本の制作を学芸員の方がやっているのを見て町石の文字がきれいに浮かび上がっていてすごいなと思いました。

実際に自分がやってみると本当に難しく、ぬらす水の量やキッチンペーパーでのふきとり具合など難しかったです。その中でも難しかったのは、墨の濃淡です。最初はなかなか加減が分からず町石の文字も浮かび上がってこなかったのですが、ア

ドバイスを頂いて墨を調節すると文字が浮かび上がって拓本を制作することができました。今回町石の拓本を制作してみて、初めは上手くいきませんでした。最後は完成することができて良かったし、町石の拓本制作という貴重な体験ができて良かったと思います。

「町石拓本体験」

二貝 繪

町石の拓本を作ると言われた時に、魚拓は見たことがあったけれど、石の拓本は見たことがなかったので



珍しいと思いました。拓本作りはしたことがなかったので手順や完成図が想像できなかったです。でも、作り方を見ていると意外と簡単で不器用な私でもできそうな作業だったので、良かったです。初めに紙をぬらして石に密着させたのに、すぐに乾いて紙が浮いてきてしまつて墨をつけるのが大変でした。墨をつけていくと文字がはつきり出てきて面白かったです。



「特別活動の感想」

木下 富博

たのですが、同じように思った人がいないのが気になります。私たちが作った拓本はうまくできた方だと見ていた方に言ってもらえたので良かったです。

大変貴重な町石に触れる機会であり、非常に価値のある体験が出来ました。指導員の先生のお手本を見た際、簡単そうにやっていたので、自分でやる際も簡単に出来そうだなと思っていたのですが、いざやってみると、紙が浮く、破れると、思い通りにいかず大変でした。しかし、機



転をかかすなどして対処したり、相手の人と協力して、なんとか完成できたので、結果としては良かったと思います。別の場所の町石でも、同じように困っている場所もあったり、綺麗にちゃんと出来ている場所もあったりと様々で、そこも面白かったです。

文化や伝統を残す為に先人は、様々な知恵を活かして頑張ってきたんだと、皆どうやって残すかと努力して来たんだというのを踏まえ、考えてみると、我々も、その意思を引き継いで、ここが終着点でなく、更に先に残すという努力や意思が必要なのかなと思いました。

高野山の文書 (十九)

「僧弘盛五鈷鈴杵寄進状」について

平安時代中期以降、弘法大師信仰の広まりにより、高野山への参詣や寄進が活発になりました。なかでも、弘法大師空海の御影を祀る御影堂には、土地や仏具など多くのものが寄進されました。今回紹介する文書は「僧弘盛五鈷鈴杵寄進状」(国宝『続宝簡集』七卷所収)という御影堂に五鈷鈴を寄進した戦国時代の寄進状

です。

寄進状の内容は、「高野山金剛峯寺御影堂に五鈷鈴杵(五鈷鈴)を常住(寺院の共有物)として寄進します。この寄進の趣意は、自利利他(自ら悟りのために修行し功德を得、他者を救済するため尽力すること)の恩徳を運び、大師(弘法大師空海)の恩に報い感謝するものです。

(釈文)

「端裏書」

御影堂寄進状 弘盛

「本文」

奉奇進高野山金剛峯寺御影堂
五古鈴杵御常住物之事

右之志者運自利々他之恩徳
奉報謝大師所也願者以
此功德無疑二世之所願仍
後用之佛具如斯

河内国同郡鷺尾住呂上之坊

弘治二年戊三月廿一日

弘盛敬白

河内国同郡鷺尾住呂上之坊
弘治二年戊三月廿一日 弘盛 白

「僧弘盛五鈷鈴杵寄進状」(国宝『続宝簡集』七卷所収)

願わくは、この功德をもつて、現世と来世の安穩を与えて下さい。よつて、後用(詳細不明)の仏具を寄進します。弘治四年(一五五八)三月二十一日、河内国河内郡鷺尾の住僧、上之坊弘盛敬白。」というものです。

差出人の弘盛が空海への篤い信仰心を持って寄進したことがわかりますが、日付の三月二十一日に寄進したことも見逃せません。三月二十一日は、空海が入定した日にあたり、その日に高野山に参詣し、寄進したと考えられます。『続宝簡集』には、御影堂への寄進状が多数収載されていますが、各月の二十一日、とりわけ三月二十一日の寄進状がよく見られます。

日付の上の年を見ると、「弘治二年」とあります。現代ではあまりない表現ですが、「二×二」四で弘治四年を指します。ちなみに、弘治四年は二月二十八日までで、次の永禄に改元しています。弘治から永禄の改元は、朝廷から室町幕府(当時は滋賀県朽木谷に在所)にも伝わっ

ていなかったようで、幕府は改元から三ヵ月たった六月に改元されたことを知ります。この寄進状の差出人である弘盛もまた改元を知らなかったと考えられます。

差出人の弘盛という僧については不明ですが、「鷺尾」というのは現在の鷺尾山興法寺(大阪府東大阪市上石切)を指すと考えられます。真言宗醍醐派の寺院で、役行者の開基で、空海が苦行を行った寺院だといえます。また、本堂前の楨は、空海が所持していた杖を地中に挿したことで生じたと伝えられ、空海と縁の深い寺院です。当時は、鷺尾寺、鷺山寺と呼ばれ、たび重なる戦火により諸堂は焼失しており、永禄年間(一五五八〜七〇)に大西丹後守入道浄味という人物が再興したといえます。もしかしたら、五鈷鈴の寄進には寺院の再興を祈願する意味もあったのかもしれませんが。

御影堂には多くの宝物が納められ、その多くが霊宝館に移されています。今回紹介した五鈷鈴は現存していませんが、秋期企画展ではこの寄進状(前期)や御影堂に納められていた密教法具を展示します。

(研谷 昌志)

高野山霊宝館からのお知らせ

◎宝物貸出情報

○九州国立博物館

特集展示「版経東漸〜対馬がつなぐ仏の教え〜」

令和元年10月29日(火)〜12月22日(日)
重文 高麗版一切経のうち

大般若波羅蜜多経巻第十
経律異相巻第五十

金剛峯寺
重文附属 石田三成奉納木額（高麗版一切経附属）
金剛峯寺



重文附属 石田三成奉納木額

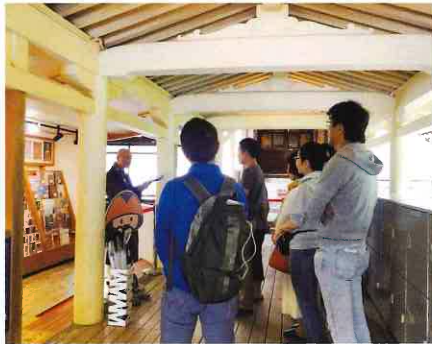
※詳細は九州国立博物館のホームページをご覧ください。

イベント報告

◎ミュージアム法話とミュージアムトーク

大宝蔵展開催期間中、ミュージアム法話4回、ミュージアムトーク1回が開催されました。ミュージアム

法話は回ごとに担当するお坊さんが異なるので、各自の個性が出る内容でした。



○電子決済ができるようになりました!

当館では8月より電子決済サービス「AirPAY（エアペイ）」を導入

し、クレジットカード、交通系電子マネー、電子マネー（iDやクイックペイなど）、QR決済が可能になりました。

年々増加する外国人参拝者やキャッシュレス化が進む世の中に対応し、拝観料支払いと物品購入の際にご利用いただけます。



◎新収蔵品の報告

7月に清高稲荷社（蓮華谷地区、地蔵院管理）より小祠、寛文十年



清高稲荷社（遍照光院向かい）

（一六七〇）稲荷大明神木札（写真）ほか紙札・書状など関連品一括を当館に収蔵いたしました。今後は当館で保存、管理します。展示予定は未定です。

また平成30年に収蔵しました釈迦文院蔵「諸尊表白（印融法印御自筆、室町時代）」の複製が神奈川県鶴岡市会より新たに制作され、当館に寄贈されました。印融法印（一四三五〜一五一九）は現在の神奈川県横浜市生まれの学僧で、関東における真言密教の復興に努めました。原本と複製を秋期企画展期間中、本館南廊に展示いたします。

お問い合わせ先 **高野山霊宝館** TEL 0736-56-2029(代)

高野山でお茶しましょ ②

129号に続き、靈宝館での拝観後におすすめのカフェ・喫茶店をご紹介します。紅葉を楽しみながらのお茶はいかがですか？（掲載情報は2019年9月時点のものです。消費税改定に伴い価格が変更する場合があります。）

カフェ&レストラン マルタカ(丸高)



靈宝館から大門方面へ歩いて約5分の場所にあり、ファミリーマートの看板と店の前の大きなウイスキー樽が目印です。

住所： 高野山795 ファミリーマート横
電話： 0736-26-7705
営： 12:00-14:30、18:00-22:00
休： 月曜 冬期不定休
座席数：20席
ランチ・ディナーあり 室内禁煙
駐車場：なし
(近くに無料の中門前駐車場や愛宕前第一駐車場あり)

2018年10月OPEN。高野山とチエコ出身の夫妻が営むお店は、レストラン兼カフェバーとして参詣・観光客や住民憩いの場となつています。洋風の雰囲気引き寄せられてか、お客様の約半分が外国人なのだそう。和食・洋食とチエコの料理、クリスマスなど時期によってはチエコのスイーツも食べられる、高野山で異郷を感じられるお店です。



とろけるチョコがたまらない、人気のフォンダンショコラ(アイス添え)はチョコと抹茶の2種類あり、コーヒーとセットで1000円(単品750円)。優しい甘さのカフェラテ(500円)や、はちみつを入れるチェコのオーガニックハーブティー(各種400円)など、これからは寒くなる高野山で温かいひとときを。※ 価格は税抜

(株)角濱総本舗 飲食部



住所： 高野山230 大門より徒歩3分
電話： 0736-26-8700
営： 9:30-17:00 (16:30ラストオーダー)
ランチは11:00-16:00 (ラストオーダー)
休： 不定休
座席数：48席 禁煙
駐車場：愛宕前第一・第二駐車場をご利用ください

創業約100年の老舗ごまとうふ専門店「角濱総本舗」が2016年10月に飲食店をOPEN。自慢の生ごまとうふを使った懐石やスイーツが味わえるお店です。高野山の四季と味覚を同時に堪能できるテラス席がおすすめ。町石道を歩いて登ってきたばかりというお客様も多いそうで、「息つきに是非お立ち寄り下さい」。ドリンク・生ごまとうふはテイクアウト可。ソフトクリーム(パニラ・朝絞り豆乳)は地元民の隠れた人気メニュー。



お店でしか味わえない抹茶ごまとうふを使った栗ぜんざい(600円)が人気です。抹茶の苦みと小豆の甘みが絶妙。左の「金ごまとうふ」(480円)は黒蜜ときなこを使ったスイーツ。定番のわさび醤油(250円)と食べ比べてみては。抹茶ラテ、朝絞り豆乳ラテは各480円。本店直送の豆乳がさっぱりした後味のコーヒーです。※ 価格は税込み

西室院 喫茶部



作り手が少なく、生産量が限られる高野紙は特別なお土産に。高野山の伝統工芸を現代の感覚でアレンジした祝儀袋や御朱印帳バンドはカラフルでとにかく「カワイイ!」。高野紙と水引で作るフラワーブーケは受注販売。

住所： 高野山697 徳川家霊台左横
電話： 0736-56-1234
営： 10:00-16:30 (ラストオーダー16:00)
休： 不定休 12月~4月上旬まで冬期休業
座席数：22席
ランチなし 禁煙
駐車場：あり

高野山の古刹・西室院が2015年8月、お寺の中に喫茶部をOPEN。歴史ある襖絵や調度品に囲まれ、中庭に面した喫茶室では静けさの中に自然の移ろいが感じられます。その場で点てる抹茶やオーガニックジューズなどドリンク・スイーツ共に豊富なメニュー。また高野紙(手漉き和紙)と水引細工の手作り小物を販売しており、お気に入りの一品を選び楽しむも、「普段は入ることのないお寺の一步奥のお部屋で多忙な日常をリセットしませんか。風の音・木々のざわめき、鳥や虫の音が心地よい空間です」。



この目玉はインドネシア直輸入の最高級コーヒー「コピ・ルアック」3,000円。野生ジャコウネコ由来の豆はマイルドながらひと味違います。レアな逸品をぜひお試しあれ。各種コーヒー・紅茶は800円、写真のオレンジケーキ(400円)は濃厚な風味とほのかな苦みでコーヒーによく合います。※ 価格は税込み